

人と災害が共存するランドスケープとは何か

—Landscape Design Student Exhibition 2011 活動報告—

what is the Landscape where People and Disaster Live Together?
-Landscape Design Student Exhibition 2011 Report-

植木 祈* 菊地 未来** 鷹野 遥***
Inoru UEKI Miku KIKUCHI Haruka TAKANO

1. はじめに

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、関東の学生は各々の状況で身をもって震災を体験した。今私たち学生が取り組むべきことは、被災地そのものの問題解決に加えて、その教訓から今後のランドスケープの役割を考えることではないだろうか。

被災地とはまた異なる経験を持った、微妙な距離感のある関東の学生だからこそ、考えなければならないこと、考えられることを実行した1年間の活動をここで報告したい。

2. LDSE について

Landscape Design Student Exhibition (以下LDSE)は、関東でランドスケープを学ぶ学生たちの企画・運営によって、大学・学部をこえた交流学习とランドスケープデザインを社会へ発信していくための作品展である。

LDSEは、作品展を通した一連の活動とその成果をまとめたアーカイブにより、ランドスケープデザイン分野の社会発信を2005年度より行っている。また、活動資金を企業の方々よりご協賛していただくことや、実務者、市民団体、大学教授をゲストとしてお招きし、レクチャーや講評をしていただくことで、社会的活動となることを目指している。

3. LDSE 2011 活動報告

(1) 活動方針

LDSEは毎年運営委員が一新されるため、毎年異なるテーマが設定される。震災があったことで多くの企業や大学、団体が震災復興の為に動いていたため、自分たちもそれに準じて活動すべきか、他の活動との違いとは何

か、私たち実行委員は7年間続いてきたLDSEを何の為に何に行くのか、自分たちの活動意義を考えた。

そこでLDSE 2011 実行委員会では、2011年が震災を転機としてランドスケープが大きく変わろうとしている時期であると捉えた。その考えのもと、被災地である東北を対象として考えるのではなく、身近な土地で震災の危険性や問題を扱うことを意図し、敷地を関東圏と定めた。

また、もうひとつの考え方として、土木的な防災技術の限界が露呈した今回の震災から、災害と人が共存するランドスケープを創造するには「防災インフラをどの程度整備するのか」「その防災インフラの整備を行うことで、人々の暮らしがどのように変化するのか」の議論の末、ヒューマンスケールから考える災害対策が今後重要であると考えた。これら2つの実行委員会の考え方を、具体的なものにしていく為、ワークショップと展示会を段階的に企画し、その中で学生同士の議論を行った。

(2) 活動テーマ

LDSE 2011では活動目的として「活動の場」「交流」「記録のアーカイブ」の3つを掲げた。「活動の場」とは、学生が主体的に社会問題や自分達の考えを主張し、学び合う「場」として機能することである。「交流」とは、ランドスケープデザインが様々な領域と関わり合い、積極的な議論をし、可能性を広げ、自分達の設計活動に活かしていくことである。「記録のアーカイブ」とは、LDSEの活動を記録した冊子を作成することである。

(3) 参加大学

参加大学としては、運営主体である東京農業大学、関東学院大学、千葉大学に加え、東京大学、明治大学、日本大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学、東京理科大学、東京都市大学、慶応義塾大学といった関東でランドスケープ・建築・都市計画を学んでいる学生が集まった。また、横浜国立大学の情報メディアを学ぶ学生と運営・冊子作成においてコラボレーションを図った。

4. 活動内容

LDSE 2011では掲げた目標を達成するために3つのphaseを企画し、それぞれにテーマを持たせた。

1st phaseでは、ヒューマンスケールを追求するためにテーマとして「human links」を掲げた。これは東日本大震災によって盤石であったはずの生活基盤が失われた状況において、人のつながりが生きるための支えとなり、その重要性が再認識されているという実行委員会の活動方針に基づいている。人のつながりといった一般的には都市計画では考えられない事象について、ヒューマンスケールから調査・分析を行い、どのような空間が必要なのかの提案を求めた。

具体的な活動としては、ヒューマンスケールからの「調査」として、様々な視点・観点から、まちを観るフィールドワークを実行した(図-1)。

2nd phaseでは、都市レベルの広い視点と長いタイムスケール、1st phaseで追求した「human links」を掛け合わせることを課題と



図-1 フィールドワークの様子



図-2 2nd phaseでの議論の様子



図-3 2nd phase 講評会の様子

*東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻 **関東学院大学大学院工学研究科建築学専攻 ***千葉大学大学院園芸学研究科園芸学専攻

した。また、2nd phaseのテーマは「災害」を掲げ、関東圏において起こりうる台風やゲリラ豪雨、洪水などの水害、住宅密集地の火災などの危険性をあぶりだし、これまでの想定を超えたときの、必要な対策について議論し、提案する場となるように企画した(図-2)。2nd phase最後の講評会では、学生が構築してきた思考・議論・スケッチなど、提案の「作業プロセス」と、提案内で作られた計画やまちの変化、人の意識の変化を作り出す「時間のプロセス」の2軸で作品を評価した(図-3)。

3rd phaseにおいては、「Vision～災害と共に暮らす～」をテーマに掲げて展示会を開催した。各地で震災に関する様々な活動に取り組んでいる学生を集め、その成果品を一同に会した。新たな視点から今後のランドスケープの「vision」を考え、議論するために、都市レベルの広い視点のものやヒューマンスケールまで捉えたもの、タイムスケールを重視した提案など幅広く募集した。

様々な視点や考えが展開されていることを踏まえ、同期間中には講評会と討論会を開催した。

(1) 講評会

展示会には13作品が展示され、そのうち東北を対象とする作品が7作品、関東を対象とする作品が6作品となった。

LDSEの作品からは都市の抱える問題として「水害」「火災」また、二次災害として「人災」を取り扱った作品が発表された(図-4)。また、外部から展示された作品からは「津波」「液化化」「地滑り」「放射能」など東日本大震災によって引き起こされた災害に対する提案、ランドスケープが作り出す復興のカタチを提案した作品が集まった。

講評会では、災害を考える上で、ランドス

ケープ、建築、都市計画のそれぞれの視点から多面的に提案を評価する為、ランドスケープ分野から平賀達也氏(ランドスケープ・プラス代表)、建築分野から藤原徹平氏(フジワラテッペイアーキテツツラボ代表)、都市計画分野から秋田典子氏(千葉大学大学院園芸学研究科准教授)に講評を依頼した。

(2) 学生討論会

討論会では東日本大震災を契機に企画してきた3つのphaseのテーマから議題を提示した。

「human links」の議題では、「人の生活を提案の中でどのように考えてきたのか、なぜ人の生活を考慮することが提案において必要なのか」に話題が集中し、人のつながりと生活について議論が交わされた。

「災害」を議題としたときは、対象地を関東圏内としたグループ、東北を対象としたグループのどちらにおいても、身近な土地や地域の「災害」を想定した議題に対しての積極的な意見を中心に議論が交わされた。

「vision～災害と共に暮らす～」という議題では、日本という国で生活すること、つまり「災害と共に暮らす」ことをどのようにランドスケープが扱っていくのか、これからの生活はどう変わってゆくのか、を参加した学生同士が自分の取り組んだ作品を通じて議論を交わし、それぞれが思ったこと、感じてきたこと、考えていることをぶつけ合う場となった。討論の結論としてテーマである「災害と共に暮らす」とは“安心”と“逃げる”こと。つまりは命をつないでゆることが大前提であり、それがランドスケープの役割であるのではないかという答えに達した。

5. 総括

1st phaseでは「human links とは何か」という議論から、ランドスケープ、建築、メ

ディアという異なる分野の視点でフィールドワークを行い、ディスカッションを重ねるなかで、参加学生は問いに対する答えを持つ事が出来たといえる。

2nd phaseでは「災害」というテーマに、被災した東北の地を設計対象地として活動するのではなく、自分たちの生活圏である関東という場所において危惧される災害を扱い、関東で災害と人が共存するとはどのようなことであるかを把握・認知することが出来た。

このような視点で災害について考えたことは、ランドスケープ、建築、都市計画の学生にとって意義深いことであったと考える。

災害というテーマにおいて、場所の特性や歴史や災害に対する地域の強さや弱さに加えて、そこに住む人々の暮らしを考慮することは、都市構造を考えるようなまちスケールにとどまらず、人の生活に関わる詳細な部分まで扱うことで災害と人が共存するランドスケープの可能性を提示することができた。

6. LDSEの展望

これからも変わらず、学生自身が課題であると感じているモノ・コトに取り組み作品作りは続けられる。その取り組みが社会に対して発信・提案されていくことが社会を動かす一つのきっかけになるのではないかと。そして、それが今までも、これからもLDSEの役割であると考える。今後のLDSEのさらなる活躍と発展に期待する。

謝辞

おわりにLDSE 2011を開催するにあたりご協賛いただいた企業の皆様、またご厚意で会場をお貸しくださった北仲スクールの皆様、講評して下さった実務者の皆様、そして参加して下さった学生の皆様がこの場をお借りしてお礼申し上げます。



図-4 関東での水害、人災をテーマとした提案